

このシリーズのねらいは、最近数多く出ている文化人類学の分野の教科書や講座などには欠けていた部分を補うことにある。すなわち最近における新分野である認識人類学、そして医療人類学、映像人類学、教育人類学などは、日本ではまだその概説も出ていなかった。また、親族論についても日本人による詳しい概説がまだなかった。そこで、これらの新分野について、若い世代の学者が中心となって執筆・解説するスタイルをとったのが、このシリーズである。

■ この巻のために ■

人類社会の起源、人間関係の論理的起点および、いまある部族社会の人間関係網を説くうえで、さげがたい社会人類学の課題——親族。それだけに社会人類学が興ったきわめて早期

■ この巻のために ■

アメリカを中心とする最近の文化人類学のもつとも新しい分野としては、医療人類学、映像人類学、教育人類学の三つがある。医療人類学は医学と人類学の重り合う領域で、現在アメリカの文化人類学のなかでも、最も関心をよんでいる分野だと言ってよい。また映像人類学は映画という技術を人類学に使う場合の方法論であり、教育人類学は教育という分野との接点である。本号は、こうした最新の三分野について、第一線の研究者が、詳しい解説を行なっている。

■ 編者略歴 ■

祖父江孝男 (そふえ・たかお)

1926年東京に生れる。

1949年東京大学理学部人類学科卒業。その後米国ハーヴァード大学、カリフォルニア大学、ヴィスコンシン大学各客員教授、明治大学教授などを経て現在国立民族学博物館教授。主要著書「県民性」「文化人類学入門」「文化人類学のすすめ」「文化とパーソナリティ」「日本人 その構造分析」(編著)「日本人はどう変ったか」(編著)「日本人の構造」(編著)など。